

トマス・ホッブズにおける神と自然

論文要旨

東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程3年

4110150002

寅野遼

本稿は17世紀イングランドの哲学者トマス・ホッブズにおける神と自然の問題を論じる。この点において特に重要なのは、彼が晩年に「神は物体である」と主張したことである。こうした主張を検討するためには、ホッブズ哲学の根本的な問題設定、様々な理論的枠組み、世界観といったものを考察しなければならない。本稿では彼自身のテキストや同時代人の批判の分析を通じて問題を抽出し、それらの関連性に注意しつつ、最終的に「神は物体である」というホッブズの主張の意義を明らかにしたい。

研究の背景

従来のホッブズ研究においては、彼の政治哲学に関心が集中してきた。自然状態からの契約や、政治と宗教の分離といった主題において、ホッブズが近代政治思想史に与えた影響は極めて大きく、こうした研究動向はある意味では当然ともいえるだろう。しかし、彼自身は生前に様々な主題についての著作を遺し、その成果は狭義の政治哲学にとどまるものではない。本稿の課題である神と自然の関係を探るためには、彼の政治哲学よりも自然哲学に注目しなければならない。そこで、まずは従来の研究において政治哲学が主題化されてきたことと、本稿に連なる先行研究の動向を整理する必要がある。

現代的な意味でのホッブズ研究がいつ頃をはじめたのかを確定するのは難しい。とはいえ、19世紀中頃における「モールズワース版著作集」の成立がひとつの契機となったことは明らかだ。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ホッブズは哲学者として様々な観点から研究の対象となった。ところが、レオ・シュトラウスはそうした研究動向を大きく変えた。彼にしたがえば、ホッブズの核心は自然権論を中心とする政治哲学であり、その成立にあたっては機械論的な自然哲学は不要であるという。彼はまた、ホッブズは様々なところで有神論的な主張を行っているが、それは周囲の人々からの無神論という批判を回避するための偽装に過ぎないと主張した。これは多くの議論を呼んだが、結果的にはホッブズの政治哲学に関心が集中するための重要なきっかけとなったように思われる。ホッブズを有神論者と見なし、自然法の重要性を強調するテイラーやウォレンダーの主張も、結果的にはこうした解釈に近い。というのも、彼らもまた自然哲学には特別の関心を向けず、宗教論についてもあくまでも倫理的な観点から考えているからだ。こうして、ホッブズ研究は倫理的および政治哲学的主題が優勢となっていった。

こうした研究動向を支えたのは、政治哲学の独立性だ。ホッブズの哲学体系において、自然哲学と政治哲学がどのように結びついているのかについては様々な仕方で論じられてきた。彼は一方では両者の緊密な結びつきを強調する。このような点を強調する限りでは、自然哲学だけを切り離して政治哲学に注目することは彼の意図を正しく反映していないことになる。しかし他方では、彼が政治哲学の独立性を認めているように読める箇所も少なくない。全体としての妥当性や整合性を細かく見ていくと、ホッブズは政治哲学をある程度独立したものとして見ており、必ずしも自然哲学からの演繹とは考えていない。この意味で、彼

の自然哲学に関心を払わずに、政治哲学に注目することはそれ自体では誤りであるとは言えないことになる。

しかし、そうした政治哲学研究にも変化が生じる。クエンティン・スキナーはどのような立場であれ、従来のホッブズ研究における解釈者の仮説や理論に強く依存した読解を激しく批判した。テキスト全体の目的や作者の真意といったものを読み込むためには、テキストだけでなく、それが書かれた時代状況や作者の様々な素養、周囲の人物との関係などの幅広いコンテキストが重要となる。スキナーのこうした提起は政治思想史の方法論に対する広範な論争へと発展した。ホッブズ研究においても、やがてコンテキストに注目した研究が増えていく。その中には、彼の修辞学や宗教的記述、さらには同時代人との論争の政治的背景など、従来とは異なる問題が主題に挙げられるようになる。

しかし、本稿が主軸とするホッブズの第一哲学や自然哲学についての研究は、まだ手薄であると言わざるをえない。もちろん、ホッブズの機械論的自然観を最初に定式化したブラントの古典的研究や、シェイピンとシャッフアーによる科学史的研究などはあり、これらは重要な成果である。また、後期アリストテレス主義との関係からホッブズを読解しようとするライエンホルストのユニークな研究も存在する。とはいえ、ホッブズ自身のとりわけ後期の自然哲学研究の成果がどのような問題意識と支えられ、どのような目標へと向かっていたのかについてはまだ包括的な記述がない。さらに、本稿のもう一つの主題である神の概念についても最近になるまで扱われてこなかった。先に述べたコンテキスト研究の中で、彼の宗教的な記述が問題になることはあるものの、哲学的な意味での神概念の位置付けはまだ十分に問われていない。

そのため、本稿ではこれまでの研究を引き受けつつ、次のような仕方で議論を展開することにしたい。まず、ホッブズにおける自然哲学の問題意識を探り、それが政治哲学にまで一貫するものであることを示す。次に、彼の哲学体系の基本となる理論的枠組みを明らかにした上で、神と人間の関係を様々な主題について触れていく。そうした問題の最終的な解決こそが「神は物体である」にあるはずだ。こうして、自然哲学を突き詰めることで神の問題を析出し、それこそが最終的には政治哲学にも通じる彼の哲学の核心であることを明らかにする。

各章ごとの要約

第1章では、ホッブズの根本的な問題意識としてのスコラ学批判の理由と意義を問う。彼がスコラ学やその源泉であるアリストテレスを批判したことはよく知られている。その理由はしばしば、新科学の勃興という同時代の傾向に帰されてきた。これは必ずしも間違いとは言えないものの、彼のスコラ学批判はそれだけにはおさまらない。『物体論』の冒頭部では、聖書と哲学の混合によってスコラ学が生じ、それこそがキリスト教世界に論争と戦争をもたらしたと述べられる。なぜ哲学の一種に過ぎないものが戦争をもたらすのであろうか。これを考察するための手がかりはホッブズの歴史的記述の中にある。彼は哲学と宗教がそれぞれ独立に始まり、中世における大学の登場によって混合されたことを問題視する。教皇は大学でのスコラ学の教育を通じて、学生たちに教皇の権威が世俗の君主よりも上位にあることを教える。そこで学んだ学生たちは卒業後に聖職者として人々に語ることで、民衆にも同様の教えを広める。哲学は大学を通じた支配装置の一部であり、それはホッブズ自身が直面したイングランド内戦の引き金にも繋がっていた。というのも、聖職者は聖餐を通じて民衆から尊敬を集めるが、そうした聖餐を権威づけているのはアリストテレスから引き出された実体

変化の学説だからである。ホッブズはそうしたアリストテレスの学説の問題点を、「ある」という繋辞の様々な変化形を実際の事物の名前であるかのように述べたことであると指摘する。そうした言葉の混乱を正しく位置付けなおし、自然哲学を新たな仕方ではじめることこそが、ホッブズにおいては最終的に政治哲学にも連なる重要な課題であった。

第2章では、ホッブズの政治哲学と自然哲学に共通するモチーフとしての創造と制作について扱う。彼はしばしば人間による作為を強調した世俗的な哲学者であると考えられてきた。にもかかわらず、彼の政治哲学上の主著である『リヴァイアサン』の冒頭部では、人間による国家の設立は神の創造を模倣することであると述べられている。もし彼が作為を強調した哲学者ならば、なぜ神の模倣といった神学的な言い回しを使わなければならないのだろうか。そもそも人間と神の間にはそもそも模倣の関係など成立するのであろうか。同時代の知識人であるアレクサンダー・ロスは、ホッブズのこうした記述を神学的な観点とアリストテレス的な観点の両面から批判している。しかし、ホッブズがここで述べようとしていたことを読み解いていくと、彼はそうした伝統的な思想を必ずしも排除しない仕方で、かつ彼の時代の新たな世界観によって再解釈を施している。すなわち、何らかの物的な素材に形を与える制作という行為において神と人間は同じことをしているのであり、そうして作られた自然物と人工物の間には質的な違いはない。こうした制作というモチーフは、『物体論』においても登場する。ホッブズは神が創造の際に混沌とした世界を秩序ある形に作ったことを、哲学における混乱した思考に秩序を与えることになぞらえている。ホッブズが哲学についての概観をする場面で思考のモデルとしているのは、人間が技術によって文明を築き上げてい過程だ。太古の人間が有益な作物の栽培方法を知ることによって豊かな生活を可能にしたように、理性の正しい使用法を知ることによって、人間は有益なものを作りあげることができる。そのため、哲学は推論によるいわば加工を経た認識として位置付けられる。人間は感覚から得られたものを様々な仕方で計算していくことで認識を作り上げていくのである。ただし、こうした認識には限界もある。政治哲学においては、神と人間の間には完全な模倣関係がある。また、自然哲学においても論理学や幾何学などについては問題ない。ところが、自然学については事情が異なる。というのも、自然の諸事物の作者は人間ではなく神であり、その創造を完全に模倣することができないからである。人間は自然の諸事物を感覚を通して断片的に受け取ることでしか判断を下すことしかできない。こうして、ホッブズの哲学は、人間が自ら創造するものについては完全な理解が可能であり、神が創造したものについては限界が存在することになる。彼は神と人間を新たな仕方で解釈しつつ、境界線を引き直しているのである。

第3章では、ホッブズの唯物論の理論的基礎を確認するために、デカルトの『省察』に対して与えられた反論を検討する。両者の論争は、しばしばホッブズがデカルトの議論を誤解しているために失敗していると評されてきた。しかし、ホッブズの主張を読み解いて行くと、必ずしもデカルトの内在的な批判には成功していないものの、一貫した議論を展開していることがわかる。まず、両者の根本的な相違点として、第二省察における「私は思惟する事物である」という命題をめぐる議論がある。ホッブズはこの命題を「私は思惟する、ゆえに私は思惟である」のようなナンセンスな論証であると指摘する。彼にしたがえば、思惟という作用を支えるための基体は、思惟とは別の何か、すなわち物体でなければならない。そこからして、あらゆる基体は物体であることになり、思惟する事物としての「私」もまた物体でなければならない。デカルトはこれに対して、基体もしくは実体が精神と物体、思惟と延長に区別されることは誰もが認めていることだと答弁する。しかし、こうした批判はホッ

ブズからすれば、スコラ的な言葉の区別に依存するものであり、反論としては認めがたいものであっただろう。同様に、デカルトが観念を精神によって知得されるもの全てと解するのに対し、ホッブズはあくまでも感覚に由来する、とりわけ視覚的な像であると主張する。この点においても両者の用語法は根本から食い違っている。ホッブズにとって重要なのは、感覚から直接与えられたものに由来する観念と、そこから推論を進めていって得られる認識の区別である。彼からすれば、デカルトが神の観念を持っていると主張すること自体が受け容れがたい。というのも、神についての感覚的な観念は存在せず、人間は様々な観念の原因を推論によって遡ることによって神の存在を知るからである。両者はほとんど全ての面で議論が食い違っているが、これは哲学的な前提が大きく異なることはもちろん、神学的な問題に対する立場の違いもあると思われる。いずれにしても、ホッブズは二元論的な問題構成を退け、あらゆる基体もしくは実体は物体であり、作用もまたそうした物体という観点の下でのみ成立すると考えるのである。

第4章では、ホッブズにおける真理の問題について扱う。デカルトやライプニッツは、ホッブズの真理観を極めて危険なものと警戒している。というのも、ホッブズはあたかも真理とは事物ではなく名辞の内にあり、名辞の意味は人間同士の取り決めによって定められると述べているからである。もしこの通りであれば、あらゆる事柄が真理として認められうることになるのではないか。本章ではこれを探るために、まずは名辞が取り決めに基づくとはどういうことであるのか、名辞の原因として挙げられる偶有性とは何かを踏まえた上で、彼が真理をどのように考えたのかについて考察する。まず、名辞については人間が自らの思考を記録し、他人に伝達するために用いられる声であり、それは人間の裁量によって取り決められる。ホッブズはこの裁量を極めて強調している。自然の事物そのものが名辞を与えることなど考えられないし、神が最初の人間であるアダムに名辞を教えたという可能性も退ける。ここからして、名辞はあくまでも人間が事物に対して与えたものということになる。だが、どのような名辞を与えるかは人間の裁量に基づいているとしても、事物の何らかの作用が名辞の原因になっていることは明らかであり、これを説明するための概念が偶有性と呼ばれる。これまでの研究では、ホッブズの偶有性の定義が両義的であると指摘されてきた。しかし、彼の定義を細かく分析すると、偶有性とはあくまでも人間が物体を理解する際の仕方という、いわゆる「現象論的定義」こそが彼の真意であることがわかる。偶有性を物体に内在するものとして見る解釈もあるが、それは現象論的定義を前提にする限りで成り立つ。物体に偶有性が内在していることを確実に知るための審級は、ホッブズの哲学の内には存在しないからである。彼の真理観は、このような名辞と偶有性をめぐる議論からの必然的な帰結である。真理が問題になるのは、名辞と名辞を結びつけた命題においてである。だが、その場合の命題の真偽を究極的に決めるのは言葉の慣習や取り決め以上にはない。ホッブズはもし2人の人間がある問題について議論し、その推論の結果について意見が分かれるとしたら、第三者の推論に従わなければならないと述べる。真理を最終的に決定するのは人間を超えた何ものかではなく、具体的には国家の主権者のような、政治的な判定者である。この意味ではデカルトやライプニッツの危惧は正しい。しかし、おそらくホッブズは、そうした際に真理として認められるのは国家の安定を危うくしない事柄だけであると考えている。したがって、原理上はいかなることも真理として認められうるが、実践的には多くの人間にとって納得がいくものだけが真理なのである。

第5章では、ホッブズの幾何学と自然学について論じる。彼の幾何学と自然学の研究は、20世紀後半になるまで、包括的な研究はほとんど存在しなかった。また、数少ない例外に

しても、同時代人との論争を軸にしているため、ホッブズ自身がこれらの分野において何を実現しようとしていたのかは必ずしも明らかになっていない。本稿では幾何学と自然学における共通の問題と、それが彼の哲学体系全体においてどのような意義を持っているのかを明らかにする。まず、幾何学において、彼はあらゆる単位よりも小さい運動としてのコナトゥスを導入する。これによって、点のような最小の単位であっても、それよりも小さな何かを考えることができるようになる。点が分割できることはいかにも奇妙だが、これによって無限に小さな運動であっても考察するための余地が開かれることになる。自然学においても、彼がまず取り組むのは、物体の最小単位としての原子と物体が存在しない空間としての空虚によって世界が成り立っていると主張する原子論への批判である。彼は空虚が存在すると運動の伝達が全く不可能になり、極小の物体としての原子はより小さな部分へと分解できると主張する。ホッブズは原子のような固体を前提に物体を考察するのではなく、流体を基礎にして考える。水や空気のような流体は性質を変えずに分割することができるが、固体と流体の区別は分割に必要な力の程度の差でしかない。硬い物体や固体であっても、強い力を加えれば分割することができるのである。こうしてホッブズは原子論者の想定する原子と空虚による二元論的世界観を否定し、世界を様々な度合いの大きさや硬さを持った物体の集合として考える。このような世界にあっては、物体が存在しない場所としての空虚は存在せず、世界全体は物体によって充滿していることになる。では、ホッブズがそのような世界観を主張した理由は何であろうか。先行研究においては、社会的要因への還元が主張されていたが、それはテキスト読解上の難点を抱えていた。本稿ではそれを踏まえつつ、ホッブズが宇宙のいかなる微細な部分にも神の威光が満ちていると述べていたこと、また世界に空虚な場所が存在すると神がいない場所が存在してしまうと述べていることから、自然学と神の問題の近さを指摘した。すなわち、無限に小さい場所にも神の力が満ちており、そこには神がいるということになる。したがって、ホッブズは幾何学と自然学を通じて、神が存在する場所という問題を考えていたことになる。

第6章では、これまでの各章での考察を踏まえて、ホッブズにおける神の問題について論じる。これまでもホッブズを無神論者と見なす解釈と有神論者と見なす解釈が存在した。本稿は彼の個人的な信仰については問題にしないが、彼の神についての主張とその唯物論的な哲学体系が整合的に解釈できるのかについて考察を加える。まず、ホッブズが同時代人から無神論者と呼ばれたことについてだ。これを誤解と見なす見方もあるものの、同時代人の知識人たちは単なる印象や評判からではなく、彼の学説を読み解いた上で攻撃していた。彼らが問題にしていたのは、ホッブズが非物体的実体を否定したことである。非物体的実体を否定することは、天使や霊、神の存在を否定することであり、無神論者であることに繋がるのではないか。これに対して、ホッブズは後期になってから様々な仕方で弁明を試みる。その際に重要になってくるのが、自然学的考察と神学的考察の充実だ。主張そのものが大きく変わっているわけではないものの、その際の論拠がより強化され、しかも自然学と神学の論拠が相互に矛盾しない形で補われる。そうした考察の帰結が「神は物体である」だと考えられる。これは一方ではテルトゥリアヌスなどの古代の教父の意見にしたがうものとされる。また、同時に神が流体のような希薄な物体として世界に存在することで、自然学的な観点からの神の説明も可能になる。ホッブズのこうした見解をある種の偽装と見なす研究者もいるが、彼の内面的な信仰を問題にしなければ、その記述を整合的に解釈することは可能である。ホッブズの神は物体としてあらゆる場所に遍在し、様々な仕方で自然に働きかけることが可能でもある。もちろん、だからといって神が実際にどのように働いているかについて、

人間が完全に知ることはできない。彼は神の存在や聖書の記述を否定することなく、人間の自然理性によって納得できる仕方に再解釈しようと試みたのである。

結論

ホッブズが「神は物体である」と述べたことの意義は、神の存在と世俗的な政治の両立を可能にすることにある。彼にとっての根本問題であった聖書と哲学の混合による世俗世界の支配は、神が物体であるという学説によって退けられることになる。というのも、神が物体としてあらゆる場所に遍在する以上、聖職者が聖餐式を通じて人々に神の体を作る必要はないからである。非物体的実体が存在しない以上、聖職者たちは他の人々にはできない特権的なことをしているわけではないからだ。あらゆる実体は物体であり、我々はその作用ないし偶有性を感覚を通じて断片的に認識し、そこから計算的な推論によって世界の姿を構築していく。こうした感覚とそれに基づく推論を超えることがない世界観こそ、ホッブズが何よりも目指していたものに他ならない。人間が作りだした最も大いなる人工物である国家が一切を決定する。もちろん、彼は神の存在そのものを否定したわけではない。神は今も世界の内に物体として存在しているし、必要があればいつでも働くことができる。とはいえ、既に述べたように、それは聖職者だけが特権的に解釈できるものではない。本稿では神が直接的に働く可能性として考えられる奇跡の問題や、幾何学や自然学におけるより個別的な問題には立ち入ることができなかつた。しかし、本稿が示した自然と神との関係は、こうした問題を考える上でも重要な視座となりうるだろう。